

二〇一〇年三月  
島根大学  
社会福祉論集第三号抜刷

歴史物語の語り手設定の継承と展開

福田景道

# 歴史物語の語り手設定の継承と展開

Succession and Evolution of Narrative on History

福田 景道\* (Akimichi FUKUDA)

## 要旨

「歴史物語」の本質は定まらないが、該当作品には、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』『秋津島物語』『月のゆくへ』『池の藻屑』の八作品が常に挙げられる。その理由は、八作品が一体となって日本通史を完成させる点と、作品内に相互の連鎖関係と継承関係が明記される点によるのであって、内容・本質は関与しない。

日本通史の完成は、該当作品の流布を促進したと思われる。明文化された継承関係によって、歴史物語各作品の語り手の設定を比較検討すると、『大鏡』『今鏡』に『栄花物語』を加えた「世継三書」が密接に連携していることが明らかになる。それに対して、『水鏡』『増鏡』などの後続作品は、世継三書の設定を継承し、中心的歴史物語の系列には属するが、副次的なものになっている。語り手の設定に注目すると、世継三書を基軸にして、歴史物語作品群全体の新しい分類と系列化が可能になるのである。

キーワード 歴史物語、世継、大鏡、今鏡、水鏡、語り手

## 一、歴史物語の性格と範囲

本稿で取り扱う「歴史物語」とは、古代から中世にかけて成立した物語的形態の文芸的歴史叙述に限る。その本質は、「仮名文の国史」<sup>(1)</sup>、「物語風史書」<sup>(2)</sup>というように歴史書の一種と見なされる場合が目立つが、

一方で、文学作品として「歴史を主題とした物語」<sup>(4)</sup>と捉える立場も少なくなく、<sup>(5)</sup> 共通的理解には至っていない。しかし、いずれにしても、単なる「歴史の物語」の意味ではないので、歴史事実を素材とする説話文学や軍記文学がそれに含まれることはない。また、歴史上の人物や事件を題材とする創作とは言えないので、近代の歴史小説に相当させることは適切ではない。一般的な歴史文学よりもはるかに狭い意味

\* 島根大学教育学部言語文化教育講座

で用いられ、その一方で文学の範疇に収まらない側面が見られるのが、現在の「歴史物語」なのである。<sup>(6)</sup>

このように歴史物語の性格は不明確・不安定ではあるが、該当させられる作品には不一致がほとんどない。その淵源は、芳賀矢一の「歴史物語」中の一言にもとめられる。「平安時代に発生した仮名物語の歴史」との定義のもとに『栄花物語』『大鏡』『水鏡』『増鏡』『今鏡』をまず挙げ、それに近世の『池の藻屑』『月のゆくへ』を補って七作品を歴史物語と見なしたのである。これは大正七年の講義の記録であるが、これを機に、歴史物語に属する作品が固定される傾向が顕著になる。特に沼澤龍雄の一連の啓蒙的述作において、その後発見された『秋津島物語』<sup>(8)</sup>を芳賀の七作品に加えた八作品が厳密な意味での歴史物語と断じられたことが大きく影響したと思われる。<sup>(9)</sup> 歴史物語をこの八作品に限定するかのような事例も散見される。岡一男は、『月のゆくへ』と『池の藻屑』とを擬歴史物語としながらも、同じ八作品を基に歴史物語の本質を考察する。<sup>(10)</sup> 同様に、八作品を対象として、その共通項抽出によって、歴史物語の本質が考察される場合も少なくない。<sup>(11)</sup> しかし、如上の諸研究でも希には指摘されていたことではあるが、『六代勝事記』『五代帝王物語』『梅松論』のように性格上は中心の八作品と区別の困難な作品もある。<sup>(12)</sup>

私見によれば、歴史物語に共通する性質としては、基層に皇位継承史構想を内在させること、外周に杵物語形式が顕在化する傾向がある

ことが挙げられる。<sup>(13)</sup> このような点を重視して、通識に捕らわれずに歴史物語的諸作品を再分類すると、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『秋津島物語』『増鏡』『梅松論』『保暦間記』『神明鏡』を純正歴史物語とし、江戸時代成立の『月のゆくへ』『池の藻屑』を擬古的歴史物語と位置づけることができる。後統的歴史物語とも言える。『唐鏡』『源威集』『愚管抄』『神皇正統記』などは隣接作品、疑似的歴史物語として周辺に位置づけられる。杵物語形式の『無名草子』も同じく隣接する。さらにその外側には、『海人の刈藻』『苔の衣』『我身にたどる姫君』などの歴史物語的構成の作り物語、『宝物集』『世継物語』などの素材が近似する説話文学、『平家物語』『太平記』『曾我物語』などの歴史叙述的要素を内包する軍記文学などを見いだすことが可能である。

また、素材や文体に注目すれば、『水鏡』を除く平安時代の歴史物語が作り物語型と言えるのに対して、『増鏡』を除く中世歴史物語が漢文訓読型に一括でき、全体を二分することもできるであろう。『栄花物語』に始まる年代記式と、『大鏡』に発する杵物語式の二分も不可能ではない。<sup>(14)</sup>

これらは、言うまでもなく分類の一試案であって、論証を経た必然的なものではない。『栄花物語』と四鏡を中心とする八作品が選別される根拠は、作品の実相からは見いだせないことの一証左として例示したものである。

このように各作品の実態に従うと、八作品を特立させる根拠は見いだせない。それでは、なぜ、歴史物語の本流が現状のように定まったのであるか。以下に、「享受」と「継承」の観点から解答を試みる。

この中心的八作品が重視されたのは、連続して読むと間断のない通史が形成されること、作品内に相互の連鎖関係と継承関係が明記されることの二点によるのであって、内容・本質は関与していないと思われる。これが私解の要点である。

すなわち、『秋津島物語』―『水鏡』―『大鏡』―『今鏡』―『月のゆくへ』―『増鏡』―『池の藻屑』と連接させると神代以降の日本通史が完成することが、作品自体の巧拙にかかわらず享受の広がりをも促進したのではないかと思われる。平易な和文で通史を略述しているとも見なせるこれらの作品群が、中世には一般向け、初心者向けの日本史教材として活用されたであろうことは既に論じた。<sup>(15)</sup> 江戸時代前半に女性の教養書、嫁入りの具として評価された「十語五草」の中に『世継物語（大鏡）』・『弥世継物語』・『続世継物語（今鏡）』・『増鏡』・『栄花物語』・『水鏡』が入り、三分の一を歴史物語が占めることも、和文の簡明な通史形成に依拠するに違いない。ここから散逸した『弥世継』を除き、当時流布していなかったと思われる『秋津島物語』と未製作の『月のゆくへ』と『池の藻屑』を加えると、中心的八作品になるからである。

八作品が特別視される根拠の第二点は、作品相互の連結性に求めら

れる。『栄花物語』と『大鏡』とは共通の歴史意識が伏在し、両書の歴史叙述には相互補完の関係があると思われる。<sup>(16)</sup>（本稿ではこの点には触れない）。その『栄花物語』と『大鏡』の作品世界の継承を揚言して成り立ったのが『今鏡』である。『水鏡』は『大鏡』との連続性を明言する。『増鏡』が上の四作品の流れを受け継ぐことは疑えない。これらは、作品内に影響関係が直接記述されている例である。歴史物語が「成立の時点から有機的關係を有する作品群」と捉えられるのもこの事例に基づくであろう。<sup>(17)</sup> 以下にこれらの継承関係の実相を究明する。

## 二、『大鏡』と「後日物語」

一百九十歳にぞ、今年<sup>ことし</sup>はなりはべりぬる。されば、重木は百八十におよびてこそさぶらふらめど、やさしく申すなり。おのれは水尾<sup>みづのを</sup>の帝<sup>みかど</sup>（清和帝）のおりおはします年の、正月の望<sup>もち</sup>の日生<sup>ひ</sup>れてはべれば、十三代にあひたてまつりてはべるなり。けしうはさぶらはぬ年なりな。まことと人思<sup>おぼ</sup>さじ。されど、父が生<sup>なま</sup>学生<sup>がくしやう</sup>に使はれたいまつりて、「下臈<sup>げらふ</sup>なれども都ほとり」と言ふことなれば、目を見たまへて、産衣<sup>うぶぎぬ</sup>に書き置きてはべりける、いまだはべり。丙申<sup>ひのえさる</sup>の年<sup>とし</sup>にはべり（一六頁）<sup>(18)</sup>

『大鏡』において、大宅世継が自らの出自を明らかにする場面であ

る。清和帝譲位の貞観十八年（八七六）に生まれ、歴史語りの時点の万寿二年（一〇二五）までに十三代の治世を生きたことが告げられる。この間百五十年に及ぶ。自らを「一百九十歳」であると明言して矛盾を生じさせる不手際については、他の箇所にも百九十歳に整合する記述もあり、簡単に誤写として処理できない問題であるが、生年の明記と歴史の見聞の始発を元慶八年（八八四）の光孝帝即位の騒ぎと告げるなどの重要発言（三六七・三六八頁）に従って百五十歳と見ておきたい。<sup>(19)</sup> 大学寮の近くにいた父親が産衣に「丙申年」と生年を記したというのも百五十歳説に矛盾しない。貞観十八年は丙申年に当たる。表記においては百九十歳も無視できないが、世継の経歴や体験からは百五十歳と見るしかないであろう。

世継翁の青年期は、夏山繁樹翁によって明らかにされる。

ただし、おのれは、故太政のおとど貞信公、藏人の少将と申しし折の小舎人童、おほいぬまろ大犬丸ぞかし。ぬしは、その御時の母后の宮の御方の召使、高名の大宅世次とぞ言ひはべりしかな。されば、ぬしの御年は、おのれにはこよなくまさりたまへらむかし。みづからが小童にてありし時、ぬしは二十五六ばかりの男にてこそはいませしか（一四・一五頁）

藤原忠平が藏人少将であった頃の、「母后の宮」の「召使」であったことが明示される。しかし、この母后が誰で世継とどのような関係にあったかは『大鏡』には記されることがない。<sup>(20)</sup> 夏山繁樹が貞信公（忠

平）との親近性を繰り返し強調するのと対照的である。<sup>(21)</sup> 世継は語り手に徹していると言えるであろう。

なお、世継翁には、菩提講の歴史語りの当日、たまたま「わらはやみ」の発作が起こってその場に居合わせられなかった老妻が存在することが明記されている。物語の場には一度も登場しないが、世継より一回りの年長で、染殿の後（明子、文徳帝后、清和帝母）の樋洗童であり、母親も同宮に仕えていたので幼少時に忠仁公（良房）を実見したことがあるなどと詳しく紹介されている。他に藤原兼輔や良岑衆樹との恋愛や世継との結婚生活にも言及される。その場にいなくてもかわらず相当の存在感が与えられているのである（二八五〜三八八頁）。

さらに、世継妻には、

いで、この翁の女人こそ、いとかしこくものは覚えはべれ。いまひとめぐりはこのかみにさぶらへば、見たまへぬほどのことなども、あれは知りてはべめり。（三八五頁）

と、優れた記憶力の持ち主であり、世継の知らない史実を知っていることから、歴史の語り手になり得るような造型がなされている。世継が情報不足を自認して省略した「間近き御簾・簾のうち」（四〇六頁）についても、妻が臨席していれば、詳細に物語ったことであろう。その物語は『栄花物語』的な世界を展開したのではないだろうか。このように想定すれば、この最高齢の女性は『栄花物語』を象徴する存在

に見えなくもない。

さて、流布本系の『大鏡』には「後日譚」がある。「皇后宮の大夫殿、書きつがはれたる夢なり」という不可思議な一文に続いて、「後日物語（二の舞の翁の物語）」と呼ばれる短文が付加されているのである。記事内容は、『栄花物語』続編や『今鏡』との関係から無視できない部分が含まれるが、ここでは、語り手の設定に注目する。

「ある所の千日の講」で異様な老人たちが見かけられるのである。百歳ばかりにやあらむと見ゆる翁の居たるかたはらに、法師の、同じほどに見ゆる、人の中を分けて来て、この翁に、

「いとかしこく見たてまつりつけて、あながちにあまりつるなり。

そもそも御前は、一年、世次の菩提講にて物語したまひし、あながちに居寄りて、あどうちたまひしと見たてまつるは、老法師の僻目か」

と言へば、男、

「さもやはべりけむ」

と言ふ。（四二一・四二二頁）

百歳程度に見える老翁のもとに、やはり百歳に見える老法師が近寄って行き、「あなたはかつて雲林院の菩提講で、大宅世継の物語に相槌を打っていた侍ではないか」と問う情景が描かれる。問われた翁は「さもやはべりけむ」と、肯定する。「年三十ばかりなる侍めきたる者」（二五頁）として登場し、世継の歴史語りを最も熱心に聞き、

質問し、自らも語り手の役割を演じさえした若侍だったのである。三十歳だった若者が百歳の老齢に達していた。彼自身が「その年、万寿二年乙の丑の年、今年己の亥の年とや申す。八十三年にこそ、なりにてはべりけれ。」（四二三頁）と現時点を万寿二年の八十三年後の元永二年（一一一九）であると示すので、百十歳を超える程度の年齢になっていることになる。問いかけた老法師も当時の菩提講の語りの場に居合わせた人物であると思われるので、仮に二十歳であったとしても百歳は超えている。

『大鏡』の「筆記者」と老法師とが同一人物であると仮定できるなら、もう少し高齢になるかもしれない。この筆記者は、禎子内親王が母后になるという世継翁の夢想に強い関心を示すのであるが（四二〇頁）、「後日物語」でも予言どおりに禎子が立后し国母になった事実を語った後で「昔の夢はむなしかりけりや」（四二六頁）と世継の夢想の外れなかつたことを確認しているので、雲林院の筆記者と「後日物語」の叙述とに連続性が認められる。かつて、世継翁に一品宮禎子やその母宮の近侍者はいないかと問われて、「ここにあり」と名乗りでたく思いながら踏みとどまり（三六六頁）、そのことを後悔していた傍観者（「筆記者」）が八十三年後に聞き手になったという筋書きになる。ただし、この推定は、「皇后宮の大夫殿、書きつがはれたる夢なり」を衍文と見なしたとしても、『大鏡』本編の末尾と「後日物語」の書き出しとが連続せず、新しい歴史語りが展開していると認定して

はじめて成り立つ。「後日物語」冒頭の「此の年頃聞けば」の主語が新しい筆者で、本編の筆者が聞き手になったと認められるからである。

大宅世継も「後日物語」に登場する。老法師の「その世次には、またやあひたまへりし」との質問に老翁は「後三条院生まれさせたまひてなむ、あひてはべりし」と返答する(四二二頁)。かつての「侍」(この時の老法師)は世継翁に再会していたのであった。後三条院誕生は長元七年(一〇三四)であるので、世継は百五十九歳までは生きていたことになる。

さらに、一品宮禎子内親王の立后記事に、すでに誕生していた後三条帝を「なからむ末伝へさせたまふべき君におはします」(四二六頁)と世継翁が評したと述べられる。禎子立后は長元十年(一〇三七)であるが、本文に年月の記載はない。また、この世継の発言が立后時のものであるとは言えないので、長元十年まで世継が存命であったとも言えない。いずれにしても、「後日物語」の中に世継は生きているのである。

「後日物語」の設定は、『大鏡』の続編というに相応しいものと言えるであろう。しかしながら、あまりにも短い。長続きせず途絶していると思われる。<sup>(22)</sup>そのために跋文がないのが惜しまれるが、『大鏡』正編における世継の歴史語りを正統的に受け継ぐ配役が設定されていることは間違いない。万寿二年の雲林院の余韻は八十三年後までは

残っていたのである。

### 三、『今鏡』の語り手設定

『今鏡』の歴史叙述は、明確に『大鏡』のを受け継いでいる。

「世継が申しおける万寿二年(一〇二五)より、ことは嘉応二年庚寅(一一七〇)なれば、百年あまり四十の春秋に三年ばかりや過ぎ侍りぬらむ。代は十つぎあまり三つぎにやならせ給ふらむとぞおぼえ侍る。その折、『万寿二年に今年なる』と申したれば、かの後一条の帝、世を保たせ給ふ事二十年おはしまししかば、万寿二年の後、いま十かへりの春秋は残り侍らむ。神武天皇より六十八代にあたらせ給へり。その御世より申し侍らむ」<sup>(23)</sup>とて。(上・三三頁)

このように、序文において、『大鏡』の最終年時「万寿二年」後一条朝を始点とし、万寿二年以降十年間続いたので、後一条朝をも対象に加えるという宣言である。『大鏡』を正確に延長しようという主旨が明らかにされている。他にも、

世継も、帝の御ついでに国母の御事申し侍れば、この帝(後朱雀帝)の母后(彰子)の御事、このついでに申し侍るべし。(上・一三〇頁)

世継は、入道太政大臣(道長)の御栄えを申さむとて、その御事

細かに申したれば、その後より申すべけれど、水上あらはれぬは、流れのおぼつかなければ、まづ入道大臣の御有様おろおろ申し侍るべきなり。(中・二五頁)

と、『大鏡』の世継翁の歴史語りの方法を保持する姿勢が示される。「続大鏡」を成す意図の存在は疑えない。それに照応して、『大鏡』の後継者に相応しい語り手が設定されている。

『今鏡』の語り手は、大和で寺巡りをする女性が遭遇した老媪である。次のような会話によってその境遇が明らかになる。

「このわたりにおはするにや」など問へば、  
「もとは都に百年あまり侍りて、その後、山城の狛のわたりに、五十年ばかり侍りき。さて後、思ひかけぬ草のゆかりに、春日野わたりに住み侍るなり。住み処の、となりかくなりし侍るも、あはれに」

といふに、年の積り聞くほどに、みな驚きてあさましくなりぬ。  
「昔だに、さほどの齢はありがたきに、いかなる人にかおはすらむ。まことならば、ありがたき人見たてまつりつ」といへば、うち笑ひて、

「つくも髪はまだおろし侍らねど、仏の五つの忌む事を受けて侍れば、いかが浮きたる事は申さむ。祖父に侍りし者も、二百に及ぶまで侍りき。親に侍りしも、そればかりこそ侍らざりしかども、百年にあまりてみまかりにき。媪もその齢を伝へ侍るにや。」

いま いまと待ち侍りしかど、今はおもなれて、常にかくてあらむずるやうに、念仏なども怠りのみなるも、あはれになむ」といへば、(下略)(上・二七〜三一頁)

都に百年、狛に五十年、現在は春日野辺に、と転住の経緯が語られ、驚嘆すべき長寿者であることが明かされる。さらに、祖父が二百歳近く、親が百歳以上の齢を重ねる長寿の家系の一員であることが告げられる。続いて老女は祖父の正体を告白する。

祖父はむげに賤しき者に侍りき。後の宮になむ仕へまつり侍りける。名は世継と申しき。おのづからも聞かせ給ふらむ。口にまかせて申しける物語とどまりて侍るめり。親に侍りしは、生学生にて、大学に侍りき。この女をも、若くては宮仕へなどせさせ侍りて、唐の歌、大和の歌など、よくつくり詠み給へしが、越の国の司におはせし御むすめに、式部の君と申しし人(紫式部)の、上東門院の後宮と申しし時、御母の鷹司殿にさぶらひ給ひし局に、あやめと申して、まうで侍りしを、(上・三二・三三頁)

彼女の祖父は、『大鏡』を語った大宅世継だったのである。父親が「生学生」というのは世継と共通する。

また、宮仕えして「唐の歌、大和の歌」に熟達し、紫式部に近侍するなど、文学的環境には恵まれていたようである。これに続く部分で、語り手が式部によって「今鏡」「小鏡」と名付けられたことが紹介される。式部君が紫式部であることが確認されてからは、『源氏物語』



作者に親近したことが根拠となり、語り手に歴史語りが要求されているので、文学の素養も歴史を語る資格に含まれていたと推量される。

この語り手は、清少納言と親しかつたことも伝える(上・九六頁)。

『源氏物語』との関係の顕現は、『今鏡』と『栄花物語』との関係を類推させるであろう。『源氏物語』作者との繋がりを契機に歴史語りを促された際に、語り手の老嫗は、「かたがたうけたまはる事多かりしかども、物語どもにみな侍らむ」と辞退し、さらに「その後の事ゆかしけれ」と再度要請されて、語り始めることになる(上・三二・三三頁)。この「物語ども」を複数と見ると『大鏡』に加えて『栄花物語』をも指すと考えるのが自然であろう。『今鏡』の記事と『栄花物語』の歴史記述とは類似した傾向がある。『今鏡』の巻名・章段名は、『大鏡』にはないもので、『栄花物語』を継受するに違いない。元来は、『大鏡』『水鏡』『増鏡』が「三鏡」と一括されて、『今鏡』は鏡物の系列から除外される場合が多かった。伝本の標題も「新世継」(畠山本)・「統世継」(蓬左文庫本など多数)が一般的で、『栄花物語』の続編と見られていたとも考えられる。『今鏡』は、『大鏡』『栄花物語』両作品を後継するとも言えるのである。

なお、『大鏡』『後日物語』も『大鏡』の続編的性格をもち、記事内容に『栄花物語』続編との類似性が認められるが、『大鏡』本編でなされた大宅世継の予言の当否に多大な関心が向けられ、記述量が少ないので、独立した作品ではなく、『大鏡』流布本系の特有記事と見な

しておきたい。独立する『今鏡』とは異なると思われる。

#### 四、大宅世継の家系と『今鏡』

『今鏡』は、「昔」・「中頃」・「近き世」・「今の世」の四時期に全体を区分した上で、「中頃」以降の三時期を歴史叙述の対象にしていると考えられるが、語り手の経歴はこれにも即応する。この老嫗は「中頃」に現役として紫式部に仕えたのであるが、「近き世の事も、おのづから伝へ聞き」語ることができるといふ設定がなされる。また、養女・養子によって「近き世」「今の世」の情報が増えることも明言されている(上・三三頁)。大宅世継の血統を受けただけでなく、歴史の語り手としての資質を十全に備える人物に造型されているのである。

ところが、大宅世継―生学生―今鏡(『今鏡』の語り手)と続く家系には疑問がある。

『今鏡』の語り手の老嫗は、都に百年、狛に五十年居住した後、現在春日野辺で生活していると告げる。百五十歳は過ぎていたのは間違いない。『今鏡』の叙述の対象期間が百四十三年であると明示している(「百年あまり四十の春秋に三年ばかり」)、それ以上の年数を分別ある年齢で生きたと見なして大過ないであろう。幼少時に紫式部や清少納言と接していることを判断材料にしてよいなら、西暦一〇

〇〇年頃には生まれていたことになるであろう。十世紀末から十一世紀初頭にかけての誕生と考えられる。

大宅世継は、『今鏡』では「二百に及ぶまで侍りき」と記される。『大鏡』で清和帝譲位の貞観十八年（八七六）の誕生とされるので、二百年後の承保二年（一〇七五）頃まで生存したことになる。<sup>(25)</sup>

そうすると、『今鏡』を語る老嫗と祖父世継の人生は、少なくとも七十年は重なっていることになる。老嫗が七十歳になる頃までは世継翁は生きていたのである。それにもかかわらず、『今鏡』には二人の対面は描かれない。無論、描かれる必要はないので、作品の瑕疵ではないし、両作品の対象年代が接しているので語り手の生存期間の重複は避けられないことではある。やや不自然な設定になっていることを確認するにとどめる。

しかし、両人が祖父と孫であるという設定は、解釈を困難にする。世継の子で今鏡語り手の父である「生学生」は、百歳を超える長寿ではあるが、これでは一種の矛盾が生じると思われる。親―子―孫の三世代では足りないのである。

『今鏡』の老嫗は常識を越える長寿ではあるが、老化を免れてはいない。ほぼ通常どおりに歳を重ねて引退し、その後は養女・養子を情報源とするのである。老境に到ってから語り手の資格を獲得したと言え、不老であってはならないと考えることもできる。<sup>(26)</sup>この長寿認識は『大鏡』の夏山繁樹とも共通する。繁樹も六十歳代までは通常通りに

成長し加齢し、職から離れた時点から同じ状態で七十年ほどを過ごしたのである。<sup>(27)</sup>

世継翁と今鏡語り手との生年に百年以上の開きがあるので、その間に一世代しかないのでは、世継か生学生のどちらか一人はかなりの高齢で親になったと見るほかない。<sup>(28)</sup>『大鏡』の「後日物語」でこのような不自然さが生じていないのと対照的でさえある。

『今鏡』では、語り手の年齢の矛盾には関心が払われていないように思われる。緻密さや整然さを重んじるこの作品に年齢上の不自然さが見られるとすれば、それよりも世継の孫であることがはるかに重要であつたと考えてもよいであろう。語り手には、大宅世継の血統を確実に受け継ぐことのみが求められていたのではないだろうか。

『今鏡』は『栄花物語』の伝統を受け継ぎつつも、『大鏡』の正統な後継者となるべく著作されたと考えられる。そのための「世継の孫」設定なのである。

また、『今鏡』の別称「新世継」「続世継」は、「世継」の別名をもつ『栄花物語』の続編の意味とされる場合が多いが、「世継物語」とも呼ばれる『大鏡』の続編とも理解できる。『今鏡』蓬左文庫本の標題が「続世継」であることを右に記したが、これは内題の表記で、表紙は「続世継物語」になっている。他にも「続世継物語」と題される写本は存在する（徳川義親蔵本・八戸市立図書館本など）。<sup>(29)</sup>東洋大学附属図書館所蔵本『今鏡』の題は「新世継物語」である。これらの例

を見ると、『今鏡』を「世継」の続編と断定はできないであろう。それに加えて、『袋草紙』には『栄花物語』を「世継物語」と呼ぶ例が見られ、<sup>(30)</sup>「世継」と「世継物語」とは必ずしも固定した作品名として用いられていないように思われる。

歴史物語諸作品のうち、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の三作品のみが「世継」を書名に含む別名をもつ点も注目される。これら「世継三書」の間には近縁性と強い連繋とが存するのではないであろうか。後続の歴史物語には「世継」の別称はなく、語り手に世継翁の血統を受け継ぐ者もない。この三書には「成立の時点からの有機的關係」を認めてよいであろう。

しかし、その他の作品にはそのような関係はない。その例を『水鏡』に見ておきたい。

## 五、『水鏡』の継承性と離脱

『水鏡』では、まず序文に先行歴史物語『大鏡』との関係が明示されている。

万寿の頃ほひ、世継<sup>ツギ</sup>と申しし賢しき翁侍りき。文徳天皇より後つ方の事は暗からず申し置きたるよし承る。その前はいと聞き耳遠ければとて申さざりけれども、世の中を究め知らぬは、片おもむきに、今の世を誇る心出で来るも、かつは罪にも侍らん。目の前

の事を昔に似ずとは、世を知らぬ人の申すことなるべし。かの嘉祥三年より前の事を、おろく申すべし。(一九頁)<sup>(31)</sup>

大宅世継が『大鏡』で「聞き耳遠ければ」と語らなかつた時代を敢えて物語るといふ意志が表明されている。『大鏡』の作品内の仮構的存在の世継翁を、実在の人物と認めることにより、かつて『大鏡』の歴史語りの舞台となった雲林院と『水鏡』の長谷寺とは往還可能になる。両作品の語りの場を同一空間に位置づけられたと言える。しかし、『今鏡』の場合と異なつて、この二作品の語り手は赤の他人である。

この語り手たちの無縁性は、語り手の意図の齟齬をも生み出していると思われる。大宅世継は、明確な著述目的と時代区分によつて「文徳天皇より後つ方」を天皇紀の範囲に定めたのであつて、それより前の期間は構想上不要なのであつた。世継の「聞き耳遠ければ」は方便であつたが、『水鏡』の語り手はあえてそれを利用したと言ひ得る。そもそも、両者の意図は一致しない。金子大麓はここに「撰関政治の繁栄期のみを力点を置いた『大鏡』の執筆姿勢への痛切な批判」の可能性を見いだした。<sup>(32)</sup>

『水鏡』叙述の最終時点は『大鏡』を根拠に明快に決定できたのに對して、始発時点を神武帝にすることに次のような独自の説明が必要となる。

まづ神の世七代、その後、伊勢太神宮の御代より、うのかやぶきあはせずのみことまで五代。合せて十二代のことは、言葉に表し

申さむにつけて憚り多く侍るべし。神武天皇より申すべきなり。

(一九頁)

神代を省略する理由としては「憚り多し」しか示されない。『大鏡』『今鏡』『五代帝王物語』などが「憚り」を認めながらすべて「憚り」部分を叙述の対象とする点、歴史知識の提供者の仙人が神代の実見者であつて神代語りの適任者である点から見ると、神武帝始発の根拠は事実上は示されていないのである。<sup>(33)</sup>

また、「目の前の事を昔に似ずとは、世を知らぬ人の申すことなるべし」と歴史語りの対象とする時代と現代とをともに乱世と定位する点は、冬嗣流藤原氏の隆盛の時代を再現する『大鏡』と背反する。<sup>(34)</sup> 繁栄を賞賛する『大鏡』と現世を厭離する『水鏡』とはまったく異質な歴史意識に支えられている。『水鏡』は『大鏡』がふれなかつた世界を示そうとした<sup>(35)</sup> という見方もある。

極言すれば、『水鏡』本章は、『大鏡』の「天皇本紀」の対象年代だけを視界に収めて、神武天皇から仁明天皇までを対象とする契機に利用したとさえ思われる。『水鏡』には、『大鏡』を継承する序・跋の部分と、『扶桑略記』の傘下にあつて『大鏡』と乖離する部分とがまったく無関係に並立し、隣接していると言わざるを得ない。

また、『水鏡』の跋文に書物としての『大鏡』が姿を現す点も看過できない。

世あがり、才かしこかりし人の大鏡などいひて書き置きたるに鈍<sup>は</sup>

みて、(二八七頁)

大鏡の巻も凡夫の為業なれば、仏の大円鏡智の鏡にはよも侍らじ。これも、もし大鏡に思ひよそへば、そのかたち正しく見えずとも、などか水鏡の程は侍らんとてなん。(二八八頁)

これは聞き手＝筆録者の言辭であるが、『水鏡』には一作品中に、実在の人物としての大宅世継翁と書物としての『大鏡』とが併存していることになる。論理的矛盾が生じているわけではないが、後続の『増鏡』と同様の二重性、作品内世界と現実世界との交錯が起こっているとも考えられる。歴史語りの伝統の継承と書物としての『大鏡』の継承とが表明されていると言つてよいかもしれない。

『水鏡』の歴史語りの場面設定は、『大鏡』を明確に継受するものではあるが、表層的な関係にとどまり、作品構想や基本思想などにおいては乖離する点も顕著である。また、語り手は、『大鏡』の語り手との近似性を表明するが、強いものではなく、思想や人格に類似性は認められない。むしろ、相違点が際立つとも言える。すなわち、『水鏡』の歴史語りの舞台は、『大鏡』型世継物語の系譜には属するが、本流ではなく、副次的なものと言える。その語り手は、『大鏡』の後継者ではあつても、歴史の語り手としての世継一族の系流に属するものではない。

## 六、歴史物語の語り手設定の変遷

『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の三作品は、「世継」としての別名をもち、作品内世界の補完性が強い。『栄花物語』があつてはじめて『大鏡』が存在でき、『栄花物語』の歴史叙述も『大鏡』によつてその意味が明確になることはかつて述べた。<sup>(36)</sup>『今鏡』は『栄花』『大鏡』二作を正式に受け継いで成立したと思われる。語り手の設定も『大鏡』に直結し、『源氏物語』などを介して『栄花物語』にも通じている。「後日物語」の中断によつて完遂しなかつた『大鏡』の続編形成の営みは、『今鏡』の成立によつて終了したとも言えるであろう。

それに対して、『水鏡』は、右に論じたように、『大鏡』の後継作品には違ひないけれど、語り手同士の関係は見られない。『秋津島物語』には『水鏡』を補う一面が認められるが、世継三書との関係は記されず、語り手も別次元のものであることは既に指摘した。<sup>(37)</sup>

ただし、『水鏡』と『秋津島物語』とは杵物語形式を用いる点では、『大鏡』『今鏡』の系列に属する。同じ頃に歴史物語としての条件を満たして成立した『六代勝事記』や『五代帝王物語』は、古老の歴史語りの場面を顕在化させていない点で、「世継三書」の系統から離れる。特に『五代帝王物語』の方は作品冒頭で「世継」との関連性を暗示しつつも杵物語ではないので、中心的歴史物語とは見なされない。

むしろ『唐鏡』『無名草子』は杵物語である点で『大鏡』などと近い面がある。以上は十三世紀・鎌倉時代頃の作品であるが、十四世紀成立の歴史物語も数多い。『梅松論』の外杵は詳細で、享受される時代に適応して変容していく点で注目に値することは別稿で例示した。<sup>(39)</sup>しかし、いずれの場合も『大鏡』の語りの場を直接受け継いではいない。以上のような状況下にあつて、既存の歴史物語群を再編性し、鏡物の系列化を果たしたのが『増鏡』である。この点についてもすでに論証を試みたのであるが、該当箇所を引用して、説明を補足しておく。

①いさ。たゞおろく見及びし物どもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代より、いとあらゝかにしるせり。かの次には、大鏡、文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍りしにや。又世継(『栄花物語』)とか、四十帖の草子にて、延喜より堀川の先帝まではすこし細やかなめる。又なにがしの大臣の書き給へると聞き侍し今鏡に、後一条より高倉の院までありしなめり。まことや、いや世継は、隆信朝臣の、後鳥羽院の位の御ほどまでをしるしたるとぞ見え侍りし。その後の事なん、いとおぼつかなくなりけり。<sup>(40)</sup>

(二四九頁)

②かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉(『大鏡』)をこそ、仮名の日本紀にはすなれ。又かの世継が孫とかいひし、つくも髪物語(『今鏡』)も、人のもてあつかひ草になれるは、御有様のやうなる人にこそありけめ。猶の給へ。(二四八頁)

この序文中の二箇所によって『増鏡』は鏡物型の歴史物語の中枢に位置づけられる。先行の歴史物語諸作品を、自身の構想に合致するよ  
うに編成したと考えられる。この①によって、『水鏡』―『大鏡』―  
『今鏡』―『弥世継』の一系列と『栄花物語』とからなる正規の歴史  
物語群が姿を現したと推断できる。現在の中心的八作品はここに発し  
たのである。『増鏡』は、間断なき日本通史を顕在化し、先行の歴史  
物語本流との連続性を鮮明化し、自らが王朝時代の伝統を継承してい  
ることを強調できた。しかし、その歴史語りの実行者は大宅世継の血  
脈とは無縁であった。また、②の聞き手の発言によって、先行作品『大  
鏡』『今鏡』との共通性と関連性を確保したのではあるが、①と②  
とを近接させて記したことにより、作品内の歴史語りの場面と書物と  
しての作品とが分離したのではないか。『水鏡』の序と跋の間に起こつ  
た乖離と同じ現象である。聞き手にとっては老尼の語りを聞くことと、  
歴史物語を読むことが別々に意識されていると判断できる。このよ  
うに見ると、『増鏡』は「世継三書」の域には達していないと言える。

現在の中心的歴史物語八作品は、『増鏡』によって一貫した日本通  
史を形成する六作品が定められたことに端を発し、これらの流布をも  
もたらしたと考えられる。また、作品内に作品相互の連鎖関係や継承  
関係が明示されるのも『今鏡』『水鏡』と並んで『増鏡』に際立って  
いる。これも中心的作品選定に寄与するであろう。しかし、語り手の  
設定に注目すると、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の「世継三書」の連

繋は、『水鏡』や『増鏡』よりもはるかに強固に機能している。『月の  
ゆくへ』と『池の藻屑』の設定も三書とは異質である。このように、  
語り手造型の方法に基づくと、歴史物語各作品の新しい系列化、歴史  
物語史再構築が可能になるのである。

#### 注

- (1) 沼澤龍雄「歴史物語」(『日本文学大辞典』第七卷、昭和九年、新  
潮社刊)。
- (2) 松村博司「歴史物語」(『日本古典文学大辞典』第七卷、昭和六十  
年、岩波書店刊)など。
- (3) 山岸徳平「水鏡と大鏡」(『新訂増補国史大系月報』45、昭和四十  
一年五月)には、「ある構想の下に、ある時代の我が国の歴史を  
漢字仮名交じりの文で記述したもの」という定義が示される。「仮  
名書きの歴史叙述の書物」(益田宗「歴史物語」(『国史大辞典』  
平成五年、吉川弘文館刊)、「歴史を仮名で物語風に叙述した書  
物」(山中裕「歴史物語」(『平安時代史事典 本編 下』)平成六  
年、角川書店刊)という見方もある。
- (4) 岡一男「歴史物語」(『講座日本文学』第四卷「中古編Ⅱ」、昭和  
四十三年、三省堂刊。同著『古典逍遙―文学学試論―』(昭和四  
十六年、笠間書院刊)に再録)。
- (5) 増淵勝一「作り物語と歴史物語」(『総論編』歴史物語講座第一卷、

- 平成十年、風間書房刊)には「歴史物語は歴史を対象とした物語であつて、文学的感動を読者に与えることを第一義とした作品である」と結論づけられている。また、竹鼻績「歴史物語」(『日本古典文学大事典』平成十年、明治書院刊)には「平安時代に発生した歴史を素材とした物語」と説明される。
- (6) 小西甚一著『日本文藝史Ⅱ』(昭和六十年、講談社刊)四〇八頁には「これまで『歴史物語』とよばれてきた和文作品は、事実どおりである保証はないのだから、現代人が『歴史』という語に感ずる事実記載の厳密さをあまり期待しない意味で、わたくしは『世事の物語』とよぶことにしたい。そうすれば、いわゆる歴史物語における歴史性と文藝性の問題も解消しよう。」という提言が見られる。
- (7) 『芳賀矢一遺著』昭和三年、富山房刊。該当箇所はその一・二頁。
- (8) 後藤丹治「私が最近に見た秋津島物語」(『芸文』第十七年第六号、大正十五年六月。同著『中世国文学研究』(昭和十八年、磯部甲陽堂刊)に再録)参照。
- (9) 前掲の「歴史物語」(1)のほかに、「歴史物語の本質」(『国語と国文学』第四卷第四号、昭和二年四月)、「歴史物語の研究」(『日本文学講座』第三卷、昭和九年、改造社刊)がある。
- (10) 岡一男「歴史物語」(『日本文学講座』第二卷「古代の文学 後期」、昭和二十五年、河出書房刊)、「歴史物語」(前掲(4))。ともに
- 同著『古典逍遙—文芸学試論—』(昭和四十六年、笠間書院刊)に再録。
- (11) 石川徹「歴史物語の発展とその史的地位」(『国文学解釈と鑑賞』第十五卷第五号、昭和二十五年五月。同著『平安時代物語文学論』(昭和五十四年、笠間書院刊)に再録)、益田宗「歴史物語—暗中模索的素描—」(『国文学解釈と鑑賞』第二十八卷第一号、昭和三十八年一月)、河北騰「歴史物語研究史」(『総論編』(前掲(5))など。
- (12) 松村博司「歴史物語」(前掲(2))には、『六代勝事記』『五代帝王物語』『梅松論』『松蔭日記』などに「歴史物語的一面」が認められている。
- (13) 拙稿「歴史物語の範囲と系列」(『島根大学教育学部紀要』第二十七卷第一・二号、平成五年十二月、平成六年三月)参照。
- (14) 西沢正史「歴史物語・文学的特色へのアプローチ—『増鏡』を中心に—」(『総論編』(前掲(5))では、『増鏡』を『栄花物語』が賛美的に描いた王朝的世界の中世的再現」と見て、A系列として両書を一括し、『大鏡』『今鏡』のB系列と区分する見解が示される。
- (15) 拙稿「中世における歴史叙述と通史教育」(『日本文学』第四十六卷第七号、平成九年七月)。
- (16) 拙稿『大鏡』の編年史的側面—『栄花物語』の克服と追認—(『島

根大学教育学部紀要』第二十二卷第二号、昭和六十三年十二月）  
参照。

(17) 原岡文子「歴史物語」（大會根章介他編『歴史・歴史物語・軍記』  
研究資料日本古典文学第二卷、昭和五十八年、明治書院刊）。

(18) 『大鏡』本文の引用は、加藤静子他校注・訳『大鏡』（新編日本  
古典文学全集34、平成八年、小学館刊）による。以下同じ。

(19) 石川徹「百九十歳の老翁に語らせる『大鏡』の警拔な構想とその  
抱負」（『帝京大学文学部紀要（国語国文学）』第二十号、昭和六  
十三年十月。同著『王朝小説論』（平成四年、新典社刊））、「解説」  
（同著『大鏡』（新潮日本古典集成、平成元年、新潮社刊））など

に雲林院の菩提講での歴史語りの時点を万寿二年の四十年後の康  
平八年（一〇六五）と解釈して、世継の年齢は百九十歳が正しい  
という見解が提起された。これに対しては、松村博司著『栄花物  
語の研究補説篇』（平成元年、風間書房刊）に百五十歳説の優越  
性を説く形で反論があり、糸井通浩「大鏡―その語りの方法―」  
（『物語の方法―語りの意味論―』（平成四年、世界思想社刊））

に、歴史語りの場に立ち会った聴衆にとつての「今」も万寿二年  
であることから作品の「今」を康平八年とすることはできないと  
説かれた。語り手の立脚時点が万寿二年に固定されているという  
指摘もある（神尾暢子「大鏡歴史の叙述方法―藤氏史観の実践構  
成―」（『物語研究 第二集』昭和六十三年、新時代社刊）。以上

により、『大鏡』の世継の年齢は百五十歳と見ておく。

(20) この母后は、通常は班子女王（光孝帝后、宇多帝母）または藤原  
胤子（宇多帝后、醍醐帝母）と注されているが、いずれも妥当で  
はない。この点は別稿で論じる。

(21) 拙稿「不老長寿の意義と物語の世界―竹取の翁と夏山繁樹―」  
（『福祉と文化』創刊号、平成十三年三月）参照。

(22) 新編日本古典文学全集の『大鏡』には、「完結の体をなさず、途  
中で挫折したものらしい」と注される（加藤静子他校注）。

(23) 『今鏡』本文の引用は、竹鼻績著『今鏡（上・中・下）』（講談社  
学術文庫、昭和五十九年、講談社刊）により、（ ）内に適宜説  
明を補い、ふりがなは一部を除いて省略した。以下同じ。

(24) 拙稿『今鏡』に描かれる藤原道長の栄華―残映としての『大鏡』  
―（『島大國文』第十八号、平成元年十一月）参照。

(25) 万寿二年に百九十歳であったという本文に基づけば、一〇三五年  
頃までの存命になる。

(26) 拙稿「幸福な結末―御伽草子と王朝物語―」（『福祉文化』第三号、  
平成十六年二月）参照。

(27) 前掲拙稿（21）参照。  
たとえば、「生学生」が世継が二十歳代に生まれたと仮定すれば、

(28) 一〇〇〇年頃にはすでに没していて、『今鏡』語り手の親にはな  
り得ない。ただし、世継五十歳以降の誕生であれば、やや不自然



ではあるが成り立つ。

(29) 諸本の標題については、国文学研究資料館データベースの「日本  
古典籍総合目録」などに依拠した。以下同じ。

(30) 藤岡忠美校注『袋草紙』（新日本古典文学大系29、平成七年、岩  
波書店刊、三八頁）。

(31) 『水鏡』本文の引用は、金子大麓他編『校注水鏡』（新典社校注  
叢書7、平成三刊、新典社刊）による。以下同じ。

(32) 金子大麓「水鏡総論」（『水鏡』歴史物語講座第五巻、平成九年、  
風間書房刊）。

(33) 拙稿「水鏡の思想」（『水鏡』前掲〈32〉）参照。

(34) 拙稿『水鏡』構想論序説―政治史的側面と『大鏡』の継承―（『論  
叢』（秋田短期大学）第三十八号、昭和六十一年十一月）参照。

(35) 松本治久「『水鏡』の序文についての検討―『大鏡』『今鏡』など  
との比較から―」（『武蔵野日本文学』第四号、平成七年三月）。

(36) (16) に同じ。

(37) 拙稿『秋津島物語』の輪郭―「歴史物語の範囲と系列」補説―  
（『国語教育論叢』第四号、平成六年二月）。

(38) 前掲拙稿（13）（15）など参照。

(39) 拙稿「世代間コミュニケーションと歴史教育―歴史物語『梅松論』  
の継承と変容―」（『島根大学教育学部紀要』第四十二巻別冊、平  
成二十一年二月）。

(40) 拙稿「歴史物語の系譜と『増鏡』―継承性と自律性の観点から―」  
（『島大国文』第二十号、平成三年十二月）など。

(41) 『増鏡』本文の引用は、時枝誠記・木藤才藏校注「増鏡」（『神皇  
正統記・増鏡』日本古典文学大系87、昭和四〇年、岩波書店刊）  
により、（ ）内に適宜説明を補う。

※ 本稿は、国文学研究資料館基幹研究「王朝文学の流布と継承」（二  
〇〇六―二〇一〇年度）の研究成果の一部である。